

国
語

二〇二〇年度

東京純心女子中学校入学試験問題

(二日午後 特待生選抜を兼ねる)

- 一. 解答は解答用紙に記入しなさい。
- 二. 記述問題で字数制限のある場合は、
句読点・記号も一字として数えなさい。
- 三. 問題文は上下二段になっています。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

文化祭が終わると、教室内の空気は十二月の新人戦に向けて緊張感を高め
ていくようだった。夏の大会ではまだ出場できなかった一年生の中にも、新人
戦なら活躍できる子が出てくる。マチたちの科学部は関係ないが、運動部の
子たちはみな、忙しそうだった。

放課後の教室にも、部活の話題が増えていた。運動部の子たちの顔が心なし
か興奮して見える。大変そうだけど、楽しそうだ。

そんな中、ジャージに着替えたみなみがすまなそうに話しかけてきた。

「マチ、今日のことなんだけど……」

科学部に行くしたくをしていたマチは、すぐに①ピンときた。夏休みに約束
して以来、マチとみなみは高坂紙音の家を一緒に訪ねる機会が多くなつて
いた。お互いに部活がある日を選んで待ち合わせるのが当たり前になつてい
たので、今日も紙音の家と一緒にいくつもりだった。

みなみが言った。

「紙音のところ、今日は私一人で行くよ。陸上部、新人戦前でみんな張りきつ
てるから、科学部よりも終わるの、遅くなると思う」

「そうなんだ」

「うん。——紙音の家に行くのも、今日はだいぶ遅くなっちゃうんだけど」

文化祭の合唱練習の間も、みなみとマチは紙音の家を何度も訪ねた。しかし、
応対に出てくるのは最初の日と同じように、いつでも紙音のお母さんだけだっ

た。

一学期の最初、マチの制服のしつけ糸を切ってくれたあの子は、今、一人き
りの部屋で過ごしているのかもしれない。そう考えると、②胸の奥がきゅつ
となる。

「私、一人で行こうか」

マチが言うと、みなみがびつくりしたように「え」と呟いた。

「高坂さんの家なら、何度もみなみちゃんと一緒に行つたし、私一人でも
大丈夫だよ。みなみちゃん、新人戦の準備で忙しそうだし、明日も朝練があつ
て早いでしょ？」

「そうだけど、マチを一人で行かせるのは悪いよ。遠回りになるし」

みなみが断りかけたとき、思いがけず、背後から「私、行くよ」という声
がした。振り返って、驚く。

琴穂だった。

マチとみなみは思わず顔を見合わせる。そんな一人に向け、琴穂がさらに続
けた。

「私がマチと一緒に行く。今日はバスケット部、陸上部ほど遅くならないと思うか
ら、ちよつと待っていてくれれば大丈夫だよ。私にまかせて、みなみは部活に行
つて」

「助かるけど、でも」

みなみの声を遮るように、琴穂が③すばやく首を振り動かした。

「みなみってさ、しっかりしてるのはいいんだけど、一人でたくさんのことを

抱えこんでがんばりすぎるんだよね。そんなんじゃない、いつか参っちゃおうよ。

——今年の新人戦、陸上部の他の子に聞いたけど選手になれそうなんですよ？」

みなみの顔にはっとした表情が浮かぶ。琴穂がふう、と小さなため息をついた後で笑った。

「だったら、今はそっちががんばり時だよ。もっと頼ってよ。——これまで副委員長なのに全然頼りにならなかったのは、私が悪かったからさ」

言いながら、琴穂がマチを見た。「マチに仕事、だいぶ頼っちゃってたし」と

④ 悪そうに告げる。

「マチも、これまで、いろいろごめんね。私、部活を言い訳にしすぎてた。そんなこと言い出せば、みなみだって陸上部が大変なのに、委員の仕事したり、高坂さんの家、行ったりしてたんだもんね」

謝った後で照れくさそうに目を伏せた琴穂を前に、みなみがとまどうような表情を浮かべる。ややあつてから、おずおずと「いいの？」と琴穂を見た。

「頼んでも、平気？」

「うん」

琴穂が胸を張って頷いた。

一連のやりとりを驚きながら見ていたマチの頬がゆるんでいく。「ありがとう」とためらいがちにお札を言うみなみを、とてもいいと思った。

いつもしつかりしているみなみが自分たちを頼ってくれたことが、嬉しくなる。

琴穂と二人で紙音の家に向かう途中、マチは改めて琴穂に礼を言った。

「さつきはありがとう。みなみちゃん、嬉しかったと思う」

横を歩いていた琴穂が、「だって」と笑う。

「みなみ、完璧すぎるんだもん。あれ、本人何でもないふうにやってるけど、結構大変なはずだよ」

「私も実はちよつとそう思ったことがあったけど、言い出せなかったんだ。琴穂が言ってくれてよかった」

「うーん。みなみ、たぶん、自分が無理していることにも気づいてないんじゃないかなあ。自分のことって、かえってなかなか気がつけないよね。私もそうだったし」

琴穂が「ごめんね」と頭をかく。

「私も合唱の練習、リーダーなのにちゃんとやってなかった。マチに注意されてはつとしたの」

「私こそ、あのときはキツイこと言っちゃってごめん」

あわてて謝ると、琴穂が「そう？」と首を傾げた。

「全然キツくなかったよ。むしろ普段おとなしいマチから言われるなんて、私、よっぽどだったんだなって反省した。——なんか、ありがとね。陰でこそ言うんじゃないかって、面と向かって言ってくれたから、かえって気分よかったですよ」

「そんな……」

⑤ 頬がかあつと熱くなった。

——はつきり自分の意見が言えない性格を直したい。

今年の四月、マチが中学校に入学するにあたって目標にしたことだ。その一歩が踏み出せたようで胸の奥がじん、とあたたかくなる。

琴穂から本音の声を聞いたように思えたら、マチもまた、その本音にこたえなくなる。自分のことについて話してみたくなった。

「私ね、＼いい子＼とか 真面目^{まじめ}＼って言われるの、少し嫌^{いや}なんだ」

今も、琴穂から「普段おとなしいマチ」と言われたばかりだ。おとなしい、優しい、いい子。褒^ほめ言葉なのに、マチを息苦しくさせる言葉たち。琴穂がびつくりしたようにマチを見た。

「どうして？」

「自分の意見がはつきり言えない子だとか、面白くない、楽しくない子なんだって周りから思われてるようで、心配で」

話しながら、だんだんと胸のつかえが取れていく。⑥絶対^{絶対}に人には話せないと思っていたことだったのに、言葉に羽が生えたようだった。琴穂は相変わらず驚いていたが、聞き終えて大きく息を吐^はき出した。

「ごめんね、私、マチのことたくさん＼いい子＼って言った。褒^ほめ言葉のつもりだったんだけど無神経^{無神経}だったね」

「ううん。私が気にしすぎるのも確かだから」

「勉強^{なや}できる子は、悩み^{なや}なんかないと思ってた。私、マチのこと羨^{うらや}ましかつたんだ」

「ええっ？ 私こそ、琴穂は運動神経もいいし、友達も多いから悩み^{なや}なんかないと思ってた」

お互いに驚いたものの、⑦いつの間にか、一緒に笑っていた。

「本当は私、陸上部に入りたかったんだ」

マチはさらに思いきって言ってみた。

「今は科学部が楽しいし、入ったことは後悔^{こうかい}してない。だけど、四月の私は勇気がなくて……」

あのときは、琴穂に言われたことを気にしていたのだ。陸上部は練習が厳しいし、先輩^{せんぱい}たちもみんな怖^{こわ}いからやめた方がいい——、当の琴穂は四月に自分が言ったことを覚えてもいないだろう。だけど、その言葉がマチの気持ちに歯止めをかけた。

案の定、「ふうん」と他人事^{ひとごと}のように頷いた琴穂が、しかし次の瞬間^{しゅんかん}、意外なことを言った。

「陸上部かあ。確かにマチ、小学校の頃^{ころ}から長距離^{ちようきり}得意^{とく}だったもんね」

「え？」

「マラソン大会や体育の時間に見てた。私は最初に勢いよく飛ばして後半バテるのに、マチは根気強いっていうか、ペースに乱れが全然ないんだよね。最初から最後まで自分のペースを守る。すごいなあって思ってたんだ」

すぐに言葉が返せなかった。胸に、ある一文^{よみがえ}が蘇^{*2}る。図書室^{*2}で、見えな

い誰^{だれ}かが残した手紙。

『がんばってれば、見ててくれるかな。』

胸の中で、呼びかけていた。見ててくれる人は、必ず、どこかにいる。手を

ぎゅつと握り締め、⑧琴穂に向けて「ありがとう」とこたえた。

(辻村深月『サクラ咲く』より。)

*1 高坂紙音……マチとみなみの同級生で、中学入学後、登校できない状態が続いている。

*2 図書室で、見えない誰かが残した手紙……以前、マチが図書室で借りた本にはさまっていた、誰かからのメッセージ。

問一——線①「ピンときた」とありますが、この言葉の意味として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 直感的にわかった。 イ いやな予感がした。

ウ 緊張感が走った。 エ 気にさわった。

問二——線②「胸の奥がきゅつとなる」とありますが、ここからマチのどのような様子が読み取れますか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 紙音のためと想っていた訪問も実は迷惑めいわくだったと知り、申し訳なく思っている。

イ 家の外に出られないほど体調が悪い紙音のことを、かわいそうだと思えてくる。

ウ 紙音が毎日一人で部屋にいることを考えると、いたたまれなくなってくる。

エ 以前のように優しく友達思いの紙音でなくなってしまったことを、哀あわれんでいる。

問三——線③「すばやく首を振り動かした」とありますが、それはなぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マチの親切を無視して行こうとするみなみに腹が立ち、自分が強く止

めなくてはならないと思ったから。

イ 普段から仲の良いみなまとマチとの会話に入るには、よくしゃべるみなみをおさえなければ発言できないから。

ウ 制止してでも伝えておかないと、責任感の強いみなみは無理してでも行こうとするに違いないと思ったから。

エ 頑固で周囲のアドバイスを耳を傾けず、否定ばかりするみなみに仕返しをしたかったから。

問四 ④に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、

記号で答えなさい。

ア 決まり イ 機嫌 ウ すわり エ 要領

問五 ——線⑤「頬がかあつと熱くなった」とありますが、ここからマチのど

のような様子が読み取れますか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 照れくさく感じている。 イ 反省している。

ウ 戸惑っている。 エ 優越感を味わっている。

問六 ——線⑥「絶対に人には話せない」言葉に羽が生えたようだった」につ

いて、次の各問いに答えなさい。

(1) 「言葉に羽が生えたようだった」とありますが、これはどのようなことを

たとえていますか。説明しなさい。

(2) 「絶対に人には話せないと思っていたこと」とありますが、これはどのような内容ですか。説明しなさい。

問七 ——線⑦「いつの間にか、一緒に笑っていた」とありますが、それはな

ぜですか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 思い出話をしているうちに、なつかしくなったから。

イ お互いに本音を伝えているうちに、意外な一面がわかったから。

ウ ゆっくり話しているうちに、いつのまにか仲直りできたから。

エ 話しているうちに緊張が解け、心に余裕ができたから。

問八 「マチ」の人物像の説明として適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明るい性格で周囲を笑わせたり、楽しませることが得意である。

イ 思ったことをはっきりと言つたため、時に人を傷つけてしまう。

ウ 運動神経がよく活発で、リーダーの仕事も完璧にこなす。

エ おとなしく見られがちだが、自分の意見はしっかり持っている。

オ 指摘を素直に受け入れ、他人のいいところを探すこともできる。

問九 ——線⑧「琴穂に向けて『ありがとう』とこたえた」とありますが、ど

のようなことに対して感謝していますか。本文中の言葉を使って説明しな

さい。

□ 次の文章は、「桃太郎」や「一寸法師」などの昔話を題材に、幸せとは何か、どのような人物が幸運をつかむのか、などを考察したまとめの部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

最後に、この本で見えてきた、X幸運をつかむ人物とは、どんな人物だったか整理しておきたいと思います。

まず、「生まれつき備わった福分をもつ者」がいました。①このタイプの人物は、援助者からの援助を、当然のように受け取って、そこに何らためらいもありませんし、援助を受けたこと自体もすぐに忘れてしまっているようでした。これをここでは、「純粋贈与」と呼んできました。

この「純粋贈与」を与える援助者は、昔話のなかでは、山姥や鬼のような化け物として描かれたり、一方で、お婆さんや乳母のようにも②描かれています。

(中略)

これらの援助者のイメージは、とても身近な関係にある者と、それとは逆に、非常にかけ離れた関係にある者と、両極端のイメージが見られることがわかります。

私たちが、素直に援助を受け入れて、それを当然のごとく捉えて、援助を受けてもほとんど感謝しないし、すぐに忘れてしまう相手として、もっともあてはまる存在は母親でしょう。母親のイメージは、とても身近な関係にある援助

者の原型的イメージといってよいかと思います。これは言いかえれば、援助を受けてもまったくAフタンに感じないし、お返しを考えるとすら思いつかない相手ということです。これは、生まれたばかりの赤ちゃんや子どもにとっての母親のイメージということができません。赤ちゃんの場合は、援助されること自体、生きることそのものといえます。援助なしには生きていけないからです。純粋贈与を受ける人物とは、赤ちゃんや子どものように、援助されるに相応しい、援助をしなければ生きていけないような人物ということになります。昔話の主人公の多くが、赤ちゃんや子どもとして登場するのも、ここに理由があります。

これを言いかえれば、放って置けないような人物、どこか隙のあるような人物ということができます。こうした人物には、母親だけでなく、母親代わりのように世話をしてくれる人など、行った先々でBフシギなくらい、援助してくれる人が現れることになりました。その理由は、すでに述べてきたように、援助するということは、とても難しいことですので、援助を素直に受け入れてくれる人で、フタンを感じて妙に遠慮したりせず、またすぐにお返ししようとする人は、非常に援助しやすい人だからです。つまり、援助したい人は、援助しやすい人を見つけ出して、援助してしまふのです。こういう人物に対しては、よくわからないうちに、気がついたら、援助してしまっているのではないかと思います。とくに真面目なわけでも、完璧なわけでもないのに、③どちらかといえば、いい加減で、よくミスをしでかしたりしているのに、なぜか助ける人が出てきて、うまくいってしまう人というのは、こういう人だとい

とができます。(中略) こういう人物は、物語を引き寄せる人物ということができません。身近な人から援助されて、幸運をつかむ人物なのです。

一方で、④援助者には、主人公と非常にかけ離れた関係にある者もいました。山姥や鬼がそうです。このタイプの援助者は、どのように考えればいいでしょうか。

私たちは、日常生活を送るうえで、数え切れないぐらい膨大な数の援助を受けて生きています。①、朝起きて新聞を読むとします。ふつう新聞がそ

こにあることを当然のように読んでいます。誰が配達しているか、ほとんど考
えることはありませんし、読んでしまえば、記憶に残る記事があったとしても、
新聞それ自体のことも忘れてしまうでしょう。②、通学Cツウキンのため

に電車に乗った場合を考えてみましょう。電車をその時間に走らせるには、信
じられない数の人が関与しているはずで、③、そんなことは考えること

もありませんし、電車を降りてしまえば、さつきまで電車に乗っていたことす
ら、ほとんど忘れてしまうはずで、新聞や電車はお金を支払しはらっていますの
で、純粹贈与といえないように思いますが、これを自分一人のために、新聞を

Dシユツパンしゅつぱんしたり電車を走らせたりすれば、とてつもない金額になりますの
で、一人一人の受け取り手にとっては、限りなく純粹贈与に近いといえます。

このように考えると、私たちが日常生活を送るためには、直接的にも間接的
にも、数え切れないぐらいの援助者が関与してくれていることに気づきます。
これらの援助者は、ほとんどEメンシキめんしきもない、どこの誰なのかわからない

ような援助者ということができません。得体の知れない無数の援助者を表現する

ために、山姥や鬼が用いられているのは、もつともいえます。

つまり、私たちの日常生活の至るところで、援助者は、現れては消えていく
というのを絶えず繰り返しているのです。私たちは、つねに無数の援助者
から援助を受けているのです。私たちは、純粹贈与を受け続けているという意
味で、すでに「運のいい人」のはずなのです。そう思えないとすれば、そのこ
とに気づいていないからです。

ですので、気づいていない場合には、突然、鬼とつぜんが現れて、打ち出の小槌*2を
置き忘れていくというような、なんとも不自然な、ある意味では、妙にわざと
らしい援助の仕方をするようになるのです。しかも、これを援助であると気づ
いていないために、一寸法師のように、(中略) 積極的な行動によって、幸運を
つかんだという話になっているのです。この場合は、自分の能力や才能によっ
て、幸運をつかむ人物と言えます。

逆に、日常生活が、無数の援助者による援助によって成り立っていることに
気づけば、日常生活のごく当たり前のことが、⑤「**⑤**」とっていいぐらい、
運のいい出来事に思えてくるはずで、それに気づけば、これまで得体の知れ
ない援助者であった無数の人たちが、「顔」の見える援助者たちが変わって
るはずで、「顔」の見える援助者の存在に気づいたとき、私たちは感謝の気持
ちを抱いだきます。このとき、援助者からの贈与に対する反対贈与のサイクルが
回転し始めることになります。(中略) わかりやすくいえば、「ありがとう」と
いう言葉で気持ちを伝えるということです。(中略)

先ほど新聞配達の例をあげましたが、私は学生時代に短い間でしたが新聞配

達のアルバイトをしていた時期があります。まだ真つ暗な夜明け前、冬などは凍てつくような寒さに震えながら、配達に回ります。雨の降る朝は、とても辛かったことを思い出します。そんな新聞配達のアルバイトをしていると、ときどき新聞受けに、「いつもありがとうございます」とか、「雨なのに、たいへんですね。ありがとうございます。」などの感謝の言葉が書かれたメモが置かれていることがあります。それを見て、本当にうれしく思ったことを覚えています。そして、「こちらこそ氣遣ってくださって、ありがとうございます。」と呟きながら、いつもよりも心を込めて、丁寧^{ていねい}に新聞受けに新聞を入れたことを思い出します。これは、「感謝」として振る舞う反対贈与に対して、ささやかですが、さらに反対贈与が行われているといえます。「感謝」としての「贈与」は、⑥反対贈与のサイクルを回転させるスイッチのような役割をしているのです。

話を戻せば、この場合には、「心がけがよくて神に愛されている者」、つまり、自分の心がけで、幸運をつかむ人ということになります。

(山泰幸『だれが幸運をつかむのか』昔話に描かれた「贈与」の秘密』より。)

なお、本文には省略等があります。

*1 純粹贈与……見返りを求めない贈与のこと。

*2 打ち出の小槌……一寸法師の話に登場する鬼が持っていた木のハンマーのようなもの。これを振ると願いがかなう。

問一——線①「このタイプの人物」とありますが、その具体例としてあげられている人物を、本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問二——線②「描かれていました」の「れ」と同じ意味で使われているものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人から借りた本を妹によこされたので、新たに買って返した。

イ 始業式で校長先生の話されたお話が感動的で、涙が出た。

ウ 亡くなった祖母の笑顔が思い出されて、胸があたりかくなつた。

エ 弟はまだ小さいので、そんなに早くは歩かれませんか。

問三——線③「どちらかといえばうまくいってしまう人」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「どちらかといえばうまくいってしまう人」とは、どのような人物と
言いかえることができますか。本文中から二十五字で探し、はじめと終わりの五字を抜き出しなさい。

(2) 「なぜか助ける人が出てきて、うまくいってしまう」とありますが、この
ような人にはどうして助ける人が出てくるのですか。次の文の空欄に合
うように、本文中の言葉を使って四十字以内で説明しなさい。

「このような人は【四十字以内】か。」

問四 — 線④ 「援助者にはく山姥や鬼がそうです」とありますが、「山姥や鬼」はどのような存在として登場するのですか。本文中の言葉を使って四十文字以内で説明しなさい。

問五 一・二・三 に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア あるいは イ しかし ウ すると エ たとえば

問六 ⑤ に入る言葉として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真理 イ 必然 ウ 理想 エ 奇跡きせき

問七 — 線⑥ 「反対贈与のサイクルを回転させるスイッチ」とありますが、新聞配達をしていた筆者にとっての「スイッチ」は何ですか。簡潔に答えなさい。

問八 — 線X 「幸運をつかむ人物とは、どんな人物だったか」とありますが、筆者が述べる「幸運をつかむ人物」について説明した次のア～オについて、正しいものには○を、そうでないものには×を記しなさい。

ア 自分の心がけがよく、神や接する人々に良い印象を与えることで幸運をつかむ人。

イ 日々周囲に気をつかい、助けてもらえるよう必死に頼み込むことたのこで幸運をつかむ人。

ウ 各自に与えられた能力や才能を積極的に用いることによって、自分の力で幸運をつかむ人。

エ 援助されやすい性質を持ち、自分の力ではなく周囲の人々の助けによって幸運をつかむ人。

オ 生まれつき恵まれた才能があるため、それほど努力もしないのに自然と幸運をつかむ人。

問九 線A 「フタン」・B 「フシギ」・C 「ツウキン」・D 「シュッパン」・E 「メンシキ」のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

